

長江中流域の先史城壁集落研究

Study of Pre-historical Walled Settlements
in the Middle Yangtze River Basin

王 妙 発
Wang, Miaofa

ABSTRACT

The paper takes all the samples of 21 sites of the pre-historical walled settlements that have been discovered in the Middle Yangtze River Basin. Examined by surface morphology, size, layout, estimated population and settlement function, one of the selected sites -- Panlongcheng of the Shang Dynasty has been identified a city in terms of geographical definition.

一 前 言

本稿は長江中流域における「城壁」のある先史集落を研究するものである。前世紀 80 年代から、中国各地で続々と城壁に囲まれた先史集落の遺跡が発見・公表された。長江流域の場合は 70 年代に発見された盤竜城遺跡を除いて、概ね 80 年代から、城壁に囲まれる集落が流域内で発見され始めた。その数は急速に増え、公表されているのは全部で 35 ケ所となっており、その全ては規模、形と構造の異なる城壁を持つ。分布の地域は、長江の上流域（四川盆地）、中流域と下流域に亘っている。その中に、長江中流域で発見されたのは 21 ケ所がある。年代の幅は新石器時代初期の彭頭山文化（紀元前約 7,500 年－紀元前 6,100 年、C¹⁴ 測定より）から青銅器時代の商代（紀元前約 16 世紀－紀元前 11 世紀）までに亘っている。本稿では、上記の 21 ケ所の城壁を持つ集落を対象に、考古地理学の角度から検討を行いたいと思う。

本稿の研究方法についてだが、考古調査・発掘資料に基づいて、城壁集落の

立地・平面形態・規模・内部構造・人口の推定・集落機能の推測などの項目に分けて、分析・検討を展開していく。その上、さらに地理学意味での都市であるかどうかについても分析・判断を行う。

先史集落の人口試算方法については次の通りである：明確な居住区がある場合は 1 m^2 の土地に 0.025 人－0.034 人で計算し、明確な居住範囲がない場合は 1 m^2 に 0.008－0.01 人で計算する。さらに、集落の面積が 15 万 m^2 を超えた場合は面積の 25% 減らして計算する。この方法は他の学者の試算方法からヒントを得て、^[1] 筆者が独自に加味したものである。まだ完璧ではないので、より良い試算方法を日々、考案中である。

二 長江中流域の城壁集落

1. 走馬嶺^[2]

走馬嶺城壁跡は湖北省石首市焦山河郷の走馬嶺村に位置し、城壁の南西の近くに大きな湖がある。遺跡は平面が不規則な楕円形を呈し、東西方向が長く、南北方向が短い。城壁に数ヶ所の欠け口があり、その中の一部は元の城門口ではないかと考えられる。城壁は地上から直接胴突きで築かれて、地上に 5 m ぐらい残っており、その両側で円形の土台が発見されている。城外に明らかな環濠の跡がある。城内の家屋は東北側に集中しており、城内のたまった水を地形に沿って南西の門から直接湖に排出することができるになっている。城内の南西部は地勢が一番高く、一組の長方形の土台があり、大規模な建築群の跡ではないかと考えられる。土器などによって、この城壁の年代は屈家嶺文化時期よりは遅くないと判断される。

遺跡の面積データに少し食い違いがある。『考古』1998 年 4 期^[3]によると面積が 8 万 m^2 であるが、張緒球の論文「屈家嶺城址的発現和初步研究」では「周囲 1,200 m」とだけ報告されて、一応円形と見なして計算すると、面積がおおよそ 11 万 m^2 である。^[4]

人口の推定。面積のデータが二つあり、もし 8 万 m^2 ならば、可能な人口数は

2,000—2,700 人であるが、11 万㎡ならば 2,700—3,700 人になる。

集落機能の推測。円形の土台及び家屋が主に東北側に集中し、城内の溜まり水が地形に沿って南西の門から湖に排出されるようになっている。これは城内の内部配置が秩序正しく、城を建て始めるときに計画性があったことを物語っていると考えられる。また、城内西南部に大規模な建物群がある可能性は、ある種の権力と高い地位を反映しているかもしれない。そうであれば、その一連とかかわる人々及び施設がすでに存在し、それによって集落自体も恐らく独立した集落機能を持つようになっていたのではないかと思われる。この城壁の規模はそれほど大きくないが、すでに比較的豊富な集落機能を持つ可能性が高い。地理学的意味上の都市として認められる可能性はあるが、今の段階では、結論までに至らず、判断を留保する。

2. 馬家垸^[5]

馬家垸城壁遺跡は湖北省荊門市劉集郷の顕靈村に位置する。遺跡の立地は長江の中流、江漢平原の西北部、荊山山脈から平原へ移行する地帯であり、比較的平坦な崗に城壁が建てられている。遺跡は周りの地面より 2—3 m ぐらい高く、南北方向の台形を呈して、比較的完全な姿で残っている。この遺跡についてもいくつか異なる報告があり、それぞれ次の通りである。

張緒球の論文^[6]によると、東壁と西壁がいずれも長さ 600 m、南壁が長さ 400 m、北壁が比較的短く、全体の面積が 20 万㎡であるという。そのうち、南城壁は幅（厚さ）32 m あり、外側は急傾斜で、内側はゆるやかである。城壁の上に若干の高台があり、防御施設ではないかと推測される。南、北、西、東にそれぞれ欠け口があり、西門は水門である可能性がある。城壁の回りに環濠があり、西環濠は古い川筋だと分かったのだが、残りの部分は人工で切り開かれたものである。城内の北側に建物の基礎と思われる高台が一つある。また、城内で新石器時代の土器と石器の外は、いかなるその他の時代の遺物も発見されていない。この城壁の年代は屈家嶺文化時期（今より約 5,000—4,000 年前）よ

り遅いことはないだろうと考えられる。

湖北省荊門市博物館の調査報告^[7]によると、城壁の長さが640 mで、広さ（幅のこと？）が300–400 mで、面積約24 万 m^2 くらいであるという。城壁は土で築かれ、胴突きの階層がはっきり見える。南、西壁の底幅が35 mで、東、北壁の底幅が30 mである。城壁の内側に幅約5 mの土手が築かれており、外側は切り立ったまっすぐなけになっっている。城壁をめぐる環濠があり、南側と北側の局部が壊れた以外、ほぼ完全な状態で残っている。環濠の幅は30–50 mぐらいあり、河床は地面より4–6 mぐらい低く、一部の環濠は自然の川筋を利用したものである。城壁の東、南、西、北にそれぞれ城門があり、その中の西と東の城門は水門であり、南城門は幅約6 mぐらいで残っている。城内から一本の川が西北の水門から曲がりながら東南の水門に流れ込む。遺物は石器と土器の生産及び生活器具である。「この城壁は長江流域では比較的完全な状態で残されている新石器時代の城壁遺跡の一つである」と指摘される。

上述の二つの報告は面積のデータの不一致が少しある以外、他の面ではほぼ同じである。

人口の推定。全てを明確な居住範囲と見なして、20 万 m^2 で試算すると人口が3,700–5,100 人であり、24 万 m^2 で試算すると4,500–6,100 人になる。

集落機能の推測。防御用と推測される高台が若干あること、水門もあること、自然の川と人工堀を合わせた環濠などから見れば、集落の内部配置は最初から全面的な計画性があったようである。さらに、大きい面積と比較的多い人口を考慮に入ると、この遺跡は多様な非季節的機能を持つ集落と認めることができるようだ。つまり都市である可能性が大きいと思われる。筆者はこの城壁遺跡の今後の発掘の進展に強い関心を持っている。

3. 陰湘城^[8]

陰湘城壁遺跡は長江支流沮漳河の下流にあり、精確には沮漳河より東へ8km、湖北省荊州市街区から西へ約25kmの荊州区馬山鎮城村に位置する。立

地環境は丘と湖、河川の入り組む地帯である。全体の地形は東側が高く西側が低い。東側は荊山余脈の八嶺山とナツメ林が散在する丘で、西側は湖のくぼ地で、沮漳川に近い。城壁の周りは低くくぼんでおり、平均海拔はおよそ 38 m で、遺跡区だけが比較的高く、平均海拔 41–42 m である。遺跡の南約 200 m の所に荊江の大堤がある。つまり遺跡は長江のすぐそばにあるのである。

この遺跡の年代は屈家嶺文化時期から石家河文化時期にかけてであると思われる。報告書によると、『江陵県誌』23 巻に清の時代、この城壁はまだ「垣がほぼ完全」であったが、「何時建てられたかが分からない」と記載されている。

この城壁遺跡についても報告のデータに不一致なところがある。

『江漢考古』1986 年 1 期の報告によると、^[9] 胴つきの城壁の面積が 12 万 m² あり、竜山文化と屈家嶺文化の遺物（土器、石器）が発見されているという。

張緒球の論文によると、^[10] 城壁が長方形で、東西 500 m、南北 240 m（面積 12 万 m²—筆者試算）である。城壁の四角が丸い角で、四方に欠け口があり、城門の跡かもしれない。北側の欠け口は最も低く、湖とつながっていて、水門だったはずである。遺跡が周りの地面より 4–5 m 高く、地下の部分はほぼ完全な状態で残っている。護城川（環濠）があり、20 m ぐらいの幅である。年代は屈家嶺文化第一期に属する。

荊州博物館・福岡教育委員会の「発掘簡報」にはより詳しい報告がある。^[11]「遺跡の平面は少し丸い角の四角形である。東、西、南三面の城壁はほぼ完全な姿で残っており、北城壁は湖の水に流されて、すでに何も残っていない。現存の城壁は東西約 580 m、南北約 350 m（面積およそ 20.3 万 m²—筆者試算）、周囲の長さが約 1,900 m である。城壁の最も高いところと最も低いところの落差が 6.5 m ある。城壁の幅は 10–25 m であるが、東城壁の基脚の最も広い所は 46 m もある。外濠の幅は 30–40 m である。城内は東部がより高く、地形は平坦で、土を焼いた跡が大量に積み上げられており、家屋の集中するところと考えられる。遺物包含層の厚さは 3 m 以上あり、他の遺物も豊富である。遺跡の中部に南北方向で幅 50 m ぐらいの低湿地があり、遺物の分布は比較的まばらで、古

い川筋ではないかと考えられる。ボーリング探査によって、原始の稲作遺跡が存在する可能性があることが分かった。城内西部の地形は次第に高くなり、遺物包含層が豊富で、厚さ2 m以上もあり、家屋などの遺跡が存在する。この遺跡内の配置は恐らく東、西部が居住区で、中部の低く窪んだ所が稲作の農業地域で、南西部の遺物包含層の比較的疎らなところが埋葬区であると推測される。遺物包含層は下層部が大溪文化のもので、厚さ約2 m以上、中間層が屈家嶺文化と石家河文化のもので、厚さおよそ1-1.5 m、上層部が商-周時代のものである。この集落は大溪文化から西周時代まで、持続して使用されていて、東周時代になって次第に廃棄されるようになったと思われる。城壁については「使われた時期は恐らく屈家嶺文化の末期から石家河文化時期までの間」と推測される。城壁と同時期の遺物に石器と土器がある。城壁自体は二つの時期に分けることができる。第一期の城壁の年代は屈家嶺文化時期であり、原生土の上に建てられ、横断面が台形で、壁の高さ8 m、上部幅6.5 m、底部幅30 mである。城壁の内側に土手があり、土手と壁の土質・色が明らかに違うため、壁が作り上げられた後にさらに土手を積み上げたと考えられる。第二期城壁は年代が夏、商及び西周時期で、もとの城壁をさらに高く積み上げて広くしたもので、基脚の幅が45 mぐらいまでに広げられた。その後もまた何度も修繕されている。

岡村秀典・張緒球の論文「湖北陰湘城遺址研究」では、「城壁は東西580 m、南北500 mと推定し、城内面積は約17万㎡である」、「平面はそら豆形を示し、……変形の六角形と言える」と報告されている。^[12]

人口の推定。城壁面積は12万㎡、20.3万㎡及び17万㎡という三つの数字がある。これらの数字によって試算すると、人口はそれぞれ3,000-4,000人、3,800-5,100人及び3,100-4,300人と推定される。

集落機能の推測。低く窪んだ所に水門があり、地形の高いところに家屋が集中し、遺物包含層の厚さが3 m以上もあり、遺物も豊富であることなどから、この集落は長い年月に亘って使用されていたことが分かる。遺跡の中部は恐らく古い川筋あるいは稲作の遺跡だとの報告もある。集落の配置としては恐らく、

居住区が東、西部にあり、中部の低いくぼ地は稲作の農業地域で、南西部は墓地だと推測される。このような集落の配置自体は決して例外的なものではなく、むしろ新石器時代では類似する例が多い。しかし、注目したいのは、これが比較的大規模な城壁であり、しかも上述の各種の集落機能が全て城壁内に配置されていることである（同じ新石器時代で年代の近い仰韶文化時期の西安半坡と臨潼姜寨の集落では埋葬区がいずれも環壕の外に配置されている）。もう一つ注目したいのは城壁内の明確な稲作区である。ここには恐らく二つの可能性がある。一つは城内の稲作はこの遺跡の住民の主要な産業であったことである。それならばこの遺跡は純粋な農業集落であると考えべきだろう。もう一つの可能性は城内の稲作は住民たちが従事した各種の産業の中の一つに過ぎないというものである。もし農業以外のその他の産業（集落機能）の存在を証明することができれば、この集落が都市である可能性は極めて大きいと思われる。しかしこの二点は現時点の資料だけではまだ証明できない。一つ付け加えたいが、例え多種の機能を全て備えた都市だと証明されたとしても、城内に田圃とか農業用地があることは決して例外的なことではない。戦国時代斉国の都である臨淄の城壁内に相当規模の耕地があったことはその好例である。^[13]結論はまだ出しにくいですが、様々な点から考えると、この集落は多種の機能を持つ都市である可能性がかなり大きいと思う。

4. 石家河^[14]

石家河城壁遺跡は江漢平原の中南部である湖北省天門市石河鎮に位置する。城壁の平面は長方形に近く、城内の地形は東北側が高く、南西側が低い。城外の環壕（護城河）は今なお確認できる。城壁の最も高いところは城内の地面より5 mぐらい高く、城外の地面より7–8 m高い。西城壁の中部南端と南城壁の西端が地面に残っており、地表から見える壁の幅（厚さ）は30 mあり、残りの高さは4 mぐらいある。城内では大面積の家屋遺跡と墓地在り発見されており、家屋などの建築は主に東北側に集中する。家屋は長方形で、ひと部屋だけ

のものと数部屋あるものとの二種類がある。一部の家屋に土煉瓦が使われており、これは今までに発見されている年代の中で一番古い土煉瓦である。城壁の建てられた年代は約 5,000—4,000 年前の屈家嶺文化の時期で、繁栄したのは石家河文化時期の初期及び中期である。遺物には土器、石器などがあり、遺跡には瓮棺、灰坑、柱の穴などがある。ある陶鉢の上には碗が掛けられており、なんらかの意味を持つのではないと思われる。

この遺跡の規模に関するデータにもいくつかの食い違いがある。『文物』1994 年 4 期によると、遺跡は不規則な四角形で、南北の長さ 1,200 m、東西の広さ 1,100 m で、面積が約 120 万 m^2 である。

張緒球の論文^[15]によると、城壁の周囲が 4,000 m で、面積が約 100 万 m^2 であるという。

盧可^[16]の論文によると、城壁の外に周囲 4,800 m の環壕があり、壁自体の厚さが 80—100 m あり（？）、環壕に囲まれる面積が約 180 万 m^2 に達するという。

中村慎一^[17]の論文にも同じく「囲壁外側には幅 80—100 m で周長約 4,800 m の周濠がめぐる」との言い方があり、囲まれる面積は約 180 万 m^2 に達するとしている。

人口の推定。集落の面積には 120 万 m^2 、100 万 m^2 と 180 万 m^2 という三つのデータがある。その中で 180 万 m^2 の面積は城壁外の環濠の面積も含まれていて、その上、壁自体の面積も相当含まれている（壁の厚さ 80—100 m 説もある（？））ので、人口を試算することが少し難しい。他の二つの面積データ（120 万 m^2 と 100 万 m^2 ）の表す範囲を明確な居住区と見なして試算すると、可能な人口数は 2.2 万—3 万人、あるいは 1.8 万—2.5 万人になる。

集落機能の推測。この城壁は規模が大きく、集落の人口数は最大 3 万人に達していたと推測される。特に城壁が極めて厚いのが特徴的で、最小のデータでも 30 m とあり、もし「80—100 m の壁幅」というデータが信用できるならば、建築時にかけられた時間と労働力は驚くべきものであり、専門的建築チームがすでに存在したと考えられる。また、集落配置に関する研究資料が少なく、た

だ「家屋などの建物が主に東北側で発見されている」とあるだけだが、少なくとも城内各区域の集落機能の役割分担はすでにできていて、一定の計画が存在していたと考えられる。このため、この集落はただ単一季節的機能（例えば農業）の集落だとは想像しにくいだろう。しかしこの集落の多様な機能に関する証拠がまだ少なすぎて、今の段階では、この集落は地理学意義上の多様な集落機能をそなえた都市の可能性が極めて大きいと言うことにとどまる。この集落の今後の発掘の進展に関心を持ちたいと思う。

5. 鷄鳴城^[18]

鷄鳴城城壁遺跡は湖北省の公安県にあり、江漢平原と洞庭湖平原との二大地理区域の相接地帯に位置する。この一帯の比較的大規模な河川は全て、長江本流堤防の歴史時代の決壊によって形成されたので、全て洞庭湖に注ぎ込む。洪水を防ぐ目的から、当地の河川の両岸及び都市と町などの居住区の周りに土手と排水路が多く造営され、土手内の安全地帯が「垸」と称される。鷄鳴城壁の立地は泥水河の北堤と松滋西河の西堤を挟んだ、「合順大垸」南部の一つの狭い平原である。城壁は不規則な楕円形を呈し、北東－南西の方向である。長さ約 500 m、広さ約 400 m で、面積はおよそ 15 万 m² である。城壁は大部分が残っていて、東北部側だけがなくなっている。城壁の周囲が約 1,100 m、壁の上部幅が 15 m ぐらい、底幅が約 30 m である。殆どが地上より 2－3 m 高く、西北部の城壁は他の部分よりさらに 1 m ぐらい高い。城壁の外側に環濠があり、周囲約 1,300 m、幅 20－30 m、深さ 1－2 m ぐらいである。城門の位置は分からない。東城壁の上部から人工の積み上げの痕跡が明らかに見ることができ、少なくとも 7 層ある。城壁遺跡の中部は周りより約 1 m 高い台地であって、面積は約 4 万 m² である。台地の上でたくさんの遺物が発見され、遺物包含層の厚さが 2 m ぐらいある。遺物は土器を主として、年代は屈家嶺文化時期である。鷄鳴城遺跡の中部に広面積の赤色の土が焼かれた痕跡があり、居住区だと思われる。その当時、ここの住民たちはすでに年に一度の洪水に悩まされずに済んだ

ことが分かる。

人口の推定。面積がおおよそ 15 万 m^2 で、可能な人口数は 2,800–3,800 人である。

集落機能の推測。この城壁の規模は比較的大きく、報告も比較的完全だと思う。出土物は土器を主とする。遺跡の中部に 4 万 m^2 くらいの高台があり、その遺物包含層は厚く、またそこに広い面積の赤色の焼かれた土が見られることなどから、中部は居住区であると推定される。またこれらの現象から、この集落の配置に秩序があり、しかも分業もすでにあったかかもしれないと考えられる。城壁及び環濠があるが、殆どの集落にあり得るような防御と保護機能であること以外、ほかの機能を果たしたとは考えにくいし、さらにこれを非季節的集落機能だと見なすこともできないようだ。このため、今知り得る資料からだけでは、この集落は農業以外の多種類の非季節的集落機能を持つことは認められないだろう。

今後、その他の集落機能を証明する新しい発見がある可能性は否定できないが、現在のところ、この集落は地理学意義上の都市である可能性は低いと思う。

6. 八十垱^[19]

八十垱城壁遺跡は湖南省西北部澧水下流沖積平原の東北側の澧県夢溪郷五福村八十垱村に位置する。遺跡の具体的立地は海拔 30 m で、周りの地形が広くて平坦で、北 3 km の処に平原縁の紅土崗地があり、近くに一本の小川がある。主な遺物は新石器時代初期の彭頭山文化に属するもので、今より七、八千年昔のものである。当時の遺跡は川そばの小さな高地にあり、高地の外側の坂が古い河岸である。古河は幅が約 100 m である。遺跡の東側は開豁地で少し東の湖側へ傾いているため、古河は遺跡の北東部から流れ込み、西部と南部を回った後、東の湖に流れ込む。今よりおよそ 7,500 年前から、遺跡の周りの地形に重大な変化が起き、約 7,000 年前頃、この遺跡は完全に土砂に埋もれてしまったと、今までの調査で分かったのだが、遺物包含層は殆ど地下 1–4.5 m に埋没されている（洪水氾濫によるだろう—筆者）。遺跡は初期、中期、末期と三つの時

期に分けられて、初期の範囲は最大で、3万㎡を上回るが、末期の範囲は最小で、3万㎡未満である。中期の面積は初期と末期の中間で、環壕と城壁（塙）はこの時期のものであり、集落の最も繁栄・発達した時期である。環壕と城壁の北側には古い川筋があったようで、東、南、西の三面で密封するような空間は居住と日常生活の空間だと推測される。城壁の規模は、南北の最も長いところが約200m、東西の最も広いところが約160mで、総面積が3万㎡くらいである。一番早く切り開かれたのが東部と南部の環壕（堀）であり、その後絶えず浚われたり切り開かれたりした土が環壕の内側に積み上げられ、次第に環壕に並行する壁が形成されたと思われる。環壕は上部幅が約4m、底幅と深さがいずれも2mぐらいある。城壁の幅(厚さ)は底が5mあり、上部が2mあり、高さ(残り)1-2mである。西城壁に破れ口があり、内側から外側へは栗石が敷かれた階段がある。環壕と壁の役割は、防御及び排水であろう。城内では多くの建物の遺跡が発見され、主に西北高地と東北部に分布する。家屋には半竪穴式、地面式、欄干式、土台式という四種類の形式がある。中でも地面式の数は最も多く、大部分が長方形あるいは四角形となっている。西部200㎡の範囲内で大きさが一様でない柱の穴が600個も発見され、欄干式建物の跡だろうと推測される。土台式の建物は一軒だけ発見されており、形と構造は特別でヒトデの形のように、確実に日常居住用の建物ではないと指摘されている。墓は全部で百基余りが発見され、殆ど居住区の周りに分布して、一部だけが城外環壕の内側に分布する。遺跡西北部の古い川筋に黒色の沖積土砂があり、中に数多くの有機物がほぼ完全に残され、数万のもみとイネが含まれる。出土した動物の骨格は狩猟と漁猟が、当時の経済生活の中で一定の重要度を占めていることを物語っている。家畜の骨に牛、ブタ、ニワトリなどのものがある。出土した竹・木の道具は種類が多く、農機具を主とする。また、木と竹の札に小さな穴が付けられているものもあり、穴の並べ方に規則があるようで、それは記事か占いに用いられるものだと考えられる。ほかに芦製のむしろ、麻縄、藤のロープなどの編物があり、その精巧さは今の当地の村民がつくった同類の品とほぼ同じである。黒色の土

の中でもみとイネが見つかり、すでに 1.5 万粒近くが収集されている。それらは世界ですでに発見されたもみとイネの中で一番古いものの一つで、しかも驚異的な数量で、中国各地で収集されている総数を上回っている。一部のものはまるで新穀並みの新鮮さで、1センチほどのススキ（芒）が見える。専門家はそれを「八十垵古イネ」と命名すべきだと主張する。

人口の推定。環壕と城壁に囲まれる面積が約 3 万 m² で、それほど大きくないので、可能な人口数は 750—1,000 人と推定される。

集落機能の推測。この遺跡から出土した遺物は豊富で、報告も比較的完備している。特に先史時代最初の稲粒ではないかという発見などは、言うまでもなく非常に意味があるだろう。ところが集落の機能から見れば、例え城壁と環壕がともにあったとしても、殆どの集落にもありそうな防御と保護の機能以外に、ほかの機能が見られず、さらに非季節的集落機能も見られない。このためこの集落は先史時代の農業集落であると理解するしかないだろう。

筆者がこの城壁報告の最大意義は、堀（環壕）を切り開くとき、浚った土を環壕の内側に積み上げて、次第に環壕に並行する壁が形成されたと述べているところにあると認めたい。これはまさに筆者が強調したい城壁と溝（環壕）の機能が一致する好例である。また城壁はあるときはただ溝（堀）の延長あるいはただ溝（堀）の副産物だということの好例でもある。ここの「城壁」がただ環壕を切り開いた土を積み上げることによって自然にできたものであり、決して明確な目的性と「画期的」な意義を持つわけではないことは明らかである。筆者の触れた相当数の先史集落に関する資料の中で、これほど明確に両者間の関係が報告されているのはこれが初めてである。明らかな事実だが、「城壁」の持つ「画期的な」意義に関心と情熱を注ぎすぎて、全く同じ機能の堀（溝）を殆ど無視してしまう研究者がいまだに多い。これまで特に強調されてきた城壁の持つ「画期的な」意義は恐らく何の「画期的な」意味もなく、ただ「環壕」の延伸だっただけかもしれない。

7. 城頭山^[20]

城頭山城壁遺跡の所在地は湖南省瀏陽市車溪郷南岳村にある。洞庭湖の西北岸瀏陽平原の中心地域、江漢平原に繋がるラッパ形の地帯で、平原中部の徐家崗の東南側に位置する。徐家崗の平均海拔は45.5mで、河床より2m余り高くなっている。岡地の西北部が高く、東南部が低く、城壁の外観が少し円形を呈し、大部分が残っており、数km離れた場所からでも城壁が確認できる。

この遺跡の状況について、『文物』1993年12期^[21]の報告が詳しい。要旨は次の通りである。

(1) 城壁。城壁が元々高地に建てられ、地下に大溪文化と屈家嶺文化の遺物包含層があり、城内に屈家嶺文化、石家河文化及び東周時代（楚）の遺物包含層がある。城壁の外観はほぼ円形で、外側の直径は325m（面積が約8万m²—筆者）ある。城壁の厚さは不詳だが、四つの角が少し厚く、残存の高さは最高のところが5mある。外壁は傾斜度が50度で大きく、内壁の傾斜度は15度である。南西部壁の断面は台形で、底辺が28m残っており（もともと31mに達する）、壁が高さ3mぐらい残っている。

(2) 護城河（環濠）。自然の川筋と人工の川が融合している。南西から北の門までの一部が残っていて、長さ460m、幅35m、深さ4mで、河岸が非常に急で険しい。北、東、南の環濠もまだ残っている。北壁の外側は85度の傾斜度があるので、環濠との間に通る道がないようだ。報告者が環濠は「都市（明白に「都市」との用語が使われている—筆者）用水、集落を守ること、水上運輸などの機能を一体化させ、水郷建物のモデルである」と指摘する。

(3) 城門。東、西、南、北に四つの門（欠けた所）がある。東城門は幅19m残っていて、11mの奥行きである。城外から城内へは栗石の斜面があって、恐らく排水機能を兼ね備えると報告されている。南門は幅20mが残っていて、15mの奥行きである。北門は幅32mが残っていて、水門である可能性があり、このため門内は内港であるだろうとも報告される。

(4) 城内の土台遺跡。城内南西部に土台の基礎があり、「凹」字形を呈し、

東向きで、東西 30 m、南北 60 m の大きさである。土台で屈家嶺文化と石家河文化の土器の破片が発見されている。

城内で発見された遺物は土器の生活用品を主とし、今より 4,800 年前の屈家嶺文化中期に属している。報告者は（93 年発表当時）「今まで我が国で発見されている最も古い城壁の一つだ」と指摘する。しかし「発掘が小範囲だけで行われたため、城壁全体の平面配置、城内外の手工業作業場、住民区、中心建物、墓地などについては引き続き探究しなければならない」とも説明する。

ほかに、前で言及していないか、あるいはある程度異なる内容について紹介しておく。

張緒球の論文^[22]によると、城壁の直径が 310 m 余り（面積 7.5 万 m²—筆者試算）で、胴つきで築かれて、城壁の底幅が 20 m である。東門の中央に栗石で敷かれた道があり、幅 5 m である。北門は城の内外を連結する水路となっている。城内は地面が平均的に城外より高く、中心部がさらに周りより高いため、地面にたまった水が周りの四つの城門から城外の環濠へ排水することができる。西南部は地勢が最も高く、胴つきの土台があり、大規模な建築が集中する場所である可能性が高い。また、城壁は湯家崗文化の水田遺跡の上に建てられており、全部で四回も建て替えられていた。最初のものは 6,000 年前の大溪文化の初期で、「中国の一番古い城壁遺跡だ」と専門家に認められている^[23]。その後は、大溪文化の第三期か第四期のときと、屈家嶺文化の初期と中期のときの三回に亘って再建築（リフォーム）され、城壁がさらに高く広くなっていったのである。

『中国文物報』1999 年 17 期の報道でも、この城壁は「国内で今まで発見されている一番古い先史城壁である」とされる^[24]。同報道には次のような情報も載せている。城壁は大溪文化の初期に建てられ始め、城壁とほぼ同年代の祭壇も発見されている。祭壇は黄色い土で積み上げられ、（平面は）少し円形を呈し、幅の長い部分は 25 m、短い部分は判明している部分で 10 m ある。祭壇の高さは 1 m ぐらいで、その主体部分は 1 基の墓をめぐって広がっているとみられる。祭壇の東北方向に二つの深い穴があり、中に大量の土器が積み重って置かれて

いる。「これは今まで国内で発見された中で年代の一番古い大規模な祭壇だ」との指摘もある。その他に一群の祭祀の穴が発見され、祭祀活動が主に南側に集中し、祭壇が東、西2組に分かれていることなどが分かる。

専門家はこの城壁の発見及び発掘について「中国の城壁の起源及び発展史、稲作農業の起源及び発展史、また先史集落の形態など重大な学術的課題の研究において、重要な意義を持つ^[25]」と指摘する。その上、城壁は四回も建て替えられ、年代の序列や建築技術の把握がはっきりとでき、またそれが完全に残っていることは、中国南方の城壁考古研究にとって、非常に貴重である。また、ここで発見された遺跡の時代よりもっと古い稲作水田も極めて珍しいものである。これは江蘇省呉県で発見された草鞋山遺跡の稲作水田と同じように、今まで世界で発見されている年代の最も古い稲作水田であり、稲作農業の起源と発展の研究に重要な意義を持つことは言うまでもないと、専門家は指摘する。さらに、豊県一帯は先史遺跡の数が多く、城頭山遺跡及び周辺のいくつかの古い遺跡の発掘と研究を通じて、旧石器時代から新石器時代への移行などについての重要な学術課題の解明にも貢献すると期待される。

人口の推定。この城壁の面積については二つの近似するデータがあり、7.5万㎡と8万㎡となっている。いずれも明確な居住区と見なして試算すると、人口は1,800–2,500人あるいは2,000–2,700人である。

集落機能の推測。張緒球は論文でこの城壁が「規模が巨大だ」というが、実際、8万㎡くらいの面積では、すでに知られている長江流域の城壁をもつ遺跡の中では大きいとは言えないかもしれないが、集落の多種機能を示す材料は少なくない。稲作農業の始まった重要な遺跡という点では本稿との関係はあまりないが、中国で一番古い城壁という点は筆者にとって意義が極めて大きいと言いたい（実際、前述の八十垱城壁の年代はさらに古い）。規模はそれほど大きくないが、四回も建て替えられること、年代の序列及び建築技術もはっきり把握できること、城内に栗石の道が敷かれ、城の内外が水路で通じること、城内の地面が城外より高く、中心部分が周囲の城門より高く排水しやすいという構

造や、城内西南部の胴突きの土台あるいは大型建築の集中分布区があることなどから、この城壁は建造当初から比較的完備した配置計画があったことが分かる。現に、上の引用文の中にすでに直接この集落を「都市」とする語があった。もちろん、城壁全体の平面配置、城壁内、外の手工業作業場、住民区、中心建築、墓地などの状況について資料がやはり不足してはいるが、ここは多様な非季節的集落機能を持ち、地理学的意味の上での都市であると言えるいくつかの証拠あるいは手がかりがすでにあるのではないかと思われる。結論は避けたいが、この城壁遺跡は初期都市である可能性が非常に大きいと言えるだろう。

その他に、極めて重要なことになるのだが、この遺跡は規模が大きなくても都市だとはっきりと認められるならば、長江流域全域の他の類似する城壁遺跡の初期都市の認定にも影響を与えるだろう。つまり、これまでに言及してきた多くの城壁は研究資料が不足するため「判断を留保する」とされてきたが、その多くは規模が城頭山遺跡より大きい事実から、都市として認めることができるものは少なくないだろうと思われる。また、都市群がすでに形成されていたことも考えられるだろう。今後の発掘と研究の進展によって、この点を証明することができるならば、長江流域だけではなく、最初期都市の出現、形成の過程の研究にとっても重要な意義があると思われる。

8. 門板湾^[26]

門板湾城壁遺跡は湖北省応城市南西 3km の星光村にある。遺跡の立地環境は大洪山の余脈が江漢平原と接する地帯である。その東、南、北の三面は古い川筋を境とし、西側は崗城に臨む。南北の長さが最大 1600 m で、東西の幅は測定困難である。城壁は遺跡の中心に位置し、平面がほぼ四角形で、南北最大の長さが 550 m、東西最大の幅が 400 m で、20 万 m² の総面積。西城壁は地表より 3-5 m ぐらい高く残っていて、南城壁は地表より 1-1.8 m 高く残っている。城内の東北部と西北部にそれぞれ一つの面積の比較的大きい高台がある。城壁の外に溝（環壕）があって、西側の溝は現存の長さが 260 m で、最も深い

所が3.5 mである。環濠の外周りで点状分布する家屋「台」が発見されている。城壁は家屋遺跡の上に建てられ、すぐそばに環濠がある。西城壁は断面が台形で、上部幅が狭く、13.5–14.7 mくらいが残存しており、底部の幅が40 mくらいある。また、現存の西壁の上部は地面より約3.5 m高い。城壁の外側は高く険しく、内側は少しゆるめである。西壁の中間部には幅40 mの破れ口があり、西城門と推測される。城壁に使われた土は恐らく溝を開くときに掘った土であり、一層の黄土に一層の沖積土砂となっている。しかし厚さは均一でなく、厚いところは40センチ余りに達するが、薄いところは僅か3.5センチである。また城壁の土から屈家嶺文化の遺物が出土している。環濠からの出土物も全て屈家嶺文化の遺物である。西城壁の下で大型な長方形の家屋が発見されている。方向は北向きで、東西の長さが16.2 m、南北の幅が5.5 m（最も広い所）で83 m²の総面積である。家屋は四つの部屋で構成され、六つの扉がある。家屋の壁は残存が最高2.1 mあり、今まで中国で発見されている土壁の中で、最も古く、最も高く残り、最も保存がよいものであると報告されている。居住用の地面（床）は硬くて平らで、家屋の北部分に焼いた土で築かれた散水遺跡がある。家屋の北側でまた家屋と平行する残壁が発見され、回廊だったのではないかと推測される。その他に東側でまた塀の跡が発見されて、北側にまでつながる建物があり、建築群ではないかと推測される。

人口の推定。遺跡の面積が20万m²で、それを明確な居住区と見なすと、可能な人口数は3,700–5,100人である。

集落機能の推測。関連する研究資料は同時代の他の集落より少し多いようである。面積の比較的大きい高台、環濠の外に城壁を囲むような点状に分布する数多くの「台」、四つの部屋と六つの扉を持つ83 m²の大規模な家屋、焼いた土で築かれた散水遺跡、より先進的な壁の作り方、回廊、建築群が存在する可能性などから、この遺跡は規模が比較的大きく、また集落の機能も比較的多いのではないかと考えられる。この集落は単一の農業機能だけを持つ集落とは想像しにくく、地理学意義上の都市だと認める可能性が極めて大きいと思われる。

但し、いまは推測の段階に止まり、新しい集落機能の発見を待って証明されねばならないと思う。

9. 竜嘴^[27]

竜嘴城壁遺跡は湖北省天門市石河鎮吳劉村に位置し、今より約 5,000 年から 5,500 年前の大溪文化中期から後期のもので、「湖北省内最古の城壁遺跡だ」と湖北考古研究所の専門家が指摘する。城壁の長さは約 1,100 m、城内面積は約 6 万 m²あり、それほど大きくないようである。城壁のほかに、墓や建物の遺跡が発見され、出土品は石器や土器と玉器などがある。しかし、この城壁も正式な報告がないので、これ以上の情報が得られず、人口の推定や集落機能の推測などの論述もできないため、都市と認められる可能性は低いだろう。

10. 鷄叫城^[28]

城壁遺跡は湖南省澧県澧南郷復興村にあり、台地に位置している。台地の東、西と南は自然の川で、北は造られた環濠（護城河）である。屈家嶺文化中期より早い時期から造られて、屈家嶺文化中期と後期を経て、石家河文化初期まで使用されていた城壁遺跡である。規模はそれほど小さくなく、城内面積は約 15 万 m²で、総面積は約 22 万 m²である。

人口の推定。総面積の約 22 万 m²で推算すると、可能な人口数は 1,300 人－1,700 人である。

集落機能の推測。長期間にわたって使用されていたが、規模が大きくなく、発見物は主に土器の欠けらで、多様な集落機能に関連するようなものは見られない。都市と認められる可能性は低いと考えられるが、判断を留保する。

11. 笑城^[29]

笑城城壁遺跡は湖北省天門市皂市鎮笑城村に位置し、屈家嶺文化後期から石家河文化初期まで使用された城壁である。報告によると、城壁は「堆築」（土

で積み重ねて造る)されたもので、城壁の幅は底部が20–22 mあり、上部も幅8–10 mが残っており、今でも地面より2.5–4.6 m高く立っている。東西250–360 m、南北156–305 mで、北東側がへこんでいて、全体が曲尺のような平面を示し、面積は「約9.8 万㎡」と「城内面積は約6.3 万㎡」との二つのデータがある。城北側で環濠が発見され、ほかの三面はすべて湖である。

稲作と狩猟・漁業関連の遺物が発見されている。回り25 kmの範囲内に新石器時代の城壁が4ヶ所発見されているとも報告されている。

人口の推定。面積は二つのデータがあるので、9.8 万㎡での試算人口数は約2,400 人–3,300 人で、6.3 万㎡での試算人口数は約1,600 人–2,100 人である。

集落機能の推測。関連資料が少ないので、判断を留保する。都市と認める可能性が低いだろう。

12. 陶家湖^[30]

陶家湖城壁遺跡は湖北省応城市湯池鎮にあり、屈家嶺文化後期から石家河文化初期にかけてのものである。泗竜河中流沿い、泗竜河と陶家河の合流するところに位置し、回りは緩やかな丘陵である。城壁は南北長さ1,000m、東西長さ850mで、総面積67 万㎡で、城内面積42.5 万㎡である。城内南部に高さ1 m–1.5mの大規模の台地(高所)がある。城壁底部の残存高さは25m–50mで、外には20m–45m幅の環濠がある。

人口の推定。城内面積42.5 万㎡で試算すると、可能な人口数は8,000 人–10,800 人である。

集落機能の推測。大規模な城壁遺跡で、多様な集落機能を持つ可能性があるが、資料の制約で今の段階では判断を留保する。

13. 王古溜^[31]

王古溜城壁遺跡は湖北省安陸市李畈鎮にあり、穹垱河北岸二级台地に位置して、屈家嶺文化時期から石家河文化中期までの城壁である。城壁は周辺より

4m～5m 高い台地に造られ、平面は東－西細長い円形で、外側の環濠は今は魚飼いの池になっている。城内の北東側及び北西側が大型台地で、居住区であり、赤色の焼き土が残っている。遺跡の総面積は 70 万㎡で、城壁内面積は 24 万㎡である。

人口の推定。城内面積 24 万㎡で試算すると、約 4,500 人－8,200 人である。集落機能の推測。多様な集落機能を持つ可能性があるが、正式な報告がまだ公表されておらず、関連資料が少ないため、暫らく判断を留保する。

14. 城河^[32]

城河城壁遺跡は湖北省沙洋県后港鎮城河村にあり、屈家嶺文化後期から石家河文化時期にかけてのものである。城壁の北東側は高い台地があるため、そのまま城壁として利用される一方、東、南、西、北西の城壁は人工で造られていて、城外には環濠がある。城壁の平面は不規則な楕円形で、南北の長さは 600m－800m、東西の長さは 550m－650m で、城内面積は約 50 万㎡で、環濠も含まれると 70 万㎡ある。報告者は「石家河城址に次ぐ大きさ」と指摘している。城壁・環濠のいずれも完全に保存されている。

人口の推定。城内面積 50 万㎡で試算すると、9,300 人－12,700 人である。集落機能の推測。「石家河城址に次ぐ大きさ」であるが、地上調査を行われただけで、正式な発掘がされておらず、関連資料が少ないため、判断を留保する。

15. 青河^[33]

青河城壁遺跡湖北省公安県甘廠鎮にあり、屈家嶺文化後期から石家河文化時期にかけてのもので、周辺より少し高い台地に位置している。平面は円角の梯形で、東西 300m、南北 200m－240m で、面積は 6 万㎡である。城壁の外側に環濠があり、幅は 30m－50m がある。

人口の推定。面積 6 万㎡で試算すると、約 1,500 人－2,000 人である。

集落機能の推測。地上調査を行われただけで、正式な発掘はされておらず、

関連資料が少ないため、判断を留保する。

16. 葉家廟^[34]

葉家廟城壁遺跡は湖北省孝感市朋興郷にあり、屈家嶺文化後期から石家河文化初期－中期までの城壁である。城壁の西側及び北西側は古潯水の川筋で東側及び南東部で環濠が発見されている。城内南東部は地勢の高い居住区で、西城壁の外には墓地がある。この城壁の規模は二つのデータがある。一つは南北 560m、東西 550m で、面積は約 30.8 万㎡で、「特大規模の新石器時代の城壁だ」と指摘されている。もう一つのデータは南北 420m、東西 350m で、面積は約 15 万㎡であると報告されている。

人口の推定。年代の遅い報告の面積 15 万㎡で試算すると、人口は約 2,800 人－3,800 人である。

集落機能の推測。大規模な城壁遺跡で、居住区と墓地など集落の企画がはっきりしているし、多様な集落機能を持つ可能性があるが、資料の制約で今の段階では判断を留保する。

17. 張西湾^[35]

張西湾城壁遺跡は湖北省武漢市郊外の黄陂区祁家湾鎮にあり、石家河文化初期－中期の遺跡である。北側と東側及び西側の三面城壁が発見されており、南側の城壁が発見されていない。外側の環濠が発見されて、幅は約 35m－40m がある。城内の内部構造や配置がまだ分からない。城壁は南北長さが約 296m、東西長さが約 335m で、面積は 9.8 万㎡である。

人口の推定。9.8 万㎡の面積で試算すると、約 2,400 人－3,300 人である。

集落機能の推測。公表されている資料が少ないが、多機能の都市と認められる可能性は低いと考えられ、今の段階では判断を留保する。

18. 土城^[36]

土城城壁遺跡は湖北省大悟県三里鎮にあり、石家河文化初期 - 中期の城壁である。面積は7万 m^2 である。

人口の推定。7万 m^2 の面積で試算すると1,800人-2,400人である。

集落機能の推測。発掘資料は正式に公表されていないため、判断できない。留保する。

19. 屯子山^[37]

屯子山城壁遺跡は湖北省石首市東昇鎮にあり、大溪文化後期から屈家嶺文化時期までのものである。地勢は回りより高く、北150mに走馬嶺城壁があり、「姉妹城壁」と見られ、二つの城壁は所属文化や立地環境と規模などの特徴はほぼ同じである。「走馬嶺とほぼ同じ面積」との指摘があるため、面積は8万 m^2 (?) だと推測できる。

人口の推定。8万 m^2 の面積で試算すると、約2,000人-2,700人である。

集落機能の推測。規模が小さく、多種類の集落機能を持つ可能性は低いと考えられる。正式な発掘は行われたことがなく、関連資料が少ないため、判断を留保する。

20. 蛇子嶺^[38]

蛇子嶺城壁遺跡は湖北省石首市東昇鎮にあり、東-西方向でややアーチ形の土岡で、幅は約35mである。年代は「走馬嶺と屯子山よりやや遅い」屈家嶺文化時期である。規模（面積）のデータがない。

人口の推定。面積のデータがないため、人口の試算もできない。

集落機能の推測。正式な発掘は行われたことがなく、関連資料が少ないため、判断を留保する。

21. 盤竜城^[99]

盤竜城壁遺跡は長江北岸に近い湖北省黄陂県葉店村にあり、盤竜湖に深く入り込んだ小さな半島に位置する。これは数多くある商代城壁遺跡の一つで、商王朝統治の中心地の「中原地域」から遠く離れているが、その文化様相は中原地域の同時期のものと全く同じである。ここが商王朝の一つの「方国」で、この地域にまで商王朝の統治が及んでいたと指摘されている。盤竜城壁の絶対年代についてはまだC¹⁴のデータがなくて、相対年代はおよそ鄭州の商城と同じで、商代の前期段階に属する。盤竜城集落遺跡は一つの城壁及び城外の東西約1,100 m、南北約1,100 mの丘陵地帯に途切れ途切れに分布する多くの遺跡で構成され、総面積がおよそ110万㎡に達する。城壁は大体集落の中心部に位置し、7.5万㎡前後の面積で、城壁の外に幅約10 mの溝があり、城内東北の高地に大規模な建築群が密集しており、宮殿区だと言われている。この東北の隅の高地は完全な自然地形ではなく、窪みを埋めたり高いところを削ったりして土地をならした後に、さらに胴突きで積み上げられた大型の基礎台である。基礎台で大規模な宮殿の遺跡が発見されており、城壁に囲まれているのは一つの宮城だと思われる。城内及び遺跡全土から大量の青銅器及び銅の滓などが出土している。青銅器のスタイルは黄河流域のものと同じであるが、埴塙（「將軍兜」と称される）も出土していることは、これらの青銅器が地元で造られていたことを裏づける。それ以外に、また多くの玉細工も出土しており、全てが装飾品である。もちろん生活用の土器も大量に発見されている。

人口の推定。城壁（宮城跡）の面積が約7.5万㎡で、それを全て明確な居住区と見なすと、可能な人口数は1,900—2,500人である。但し、この集落については城壁だけではなく、総面積110万㎡の盤竜城集落遺跡全体を検討の対象とすべきである。この110万㎡の範囲を全て明確な居住区ではないと試算すると、およそ6,500—8,200人と推測される。

集落機能の推測。この遺跡は少し特別だと思われる。もし宮城説が成立するならば、その住民の構成も恐らくまた異なってくるかもしれない。しかし今の

段階ではまだ推測に止まるだけで、断言できない。また出土文物はかなり多く、特に注目したいのが大量の青銅器である。その中には祭器や数多くの刀、鑿、斧、鋸などの手工業の生産用具が含まれている。玉細工が主に装飾物で、石器の種類に斧、手斧、スコップ、刀、さじなどの手工業生産用具及び生活用具が多く、普通の農業集落のように農生産用の鎌かすき類を中心としていない（銅器も農業用の鎌とかすきなどは発見されていない）。これらの特徴と関連するかもしれないが、城壁に囲まれる面積（宮城）はそれほど大きくないけれども、遺跡（集落）の総面積は110万㎡にも達する。人口の総数は少なからずあり、しかも大多数（圧倒的多数？）が非季節的職業及びこの「方国」を維持するための各種の職業に従事していただろう。この集落は二種類以上の非農業的機能を備えていたに違いなく、しかも中心地機能（行政中心と手工業及びその他）も持っていたのではないかと考えられる。このため、この集落（城壁だけではなく）はほぼ間違いなく地理学意義上の都市だと考えられる。

三 結 語

以上、長江中流域の新石器時代の初期から青銅器時代に亘っての、21ヶ所の先史時代の城壁集落について、検討・分析を行ってきた。

纏めて見ると、長江中流域の新石器時代の城壁をもつ集落の分布に、次の二つの特徴がある。一つは海拔30m－45mの丘陵平原地域に比較的集中していることで、もう一つは三日月形の分布帯を呈することである。この地域では人間の居住に適すると指摘されている。^[40]

これらの城壁集落の中で規模が最も大きいものは新石器時代の石家河城壁集落であり（120万㎡と100万㎡と二つのデータがある）、その次は青銅器時代の盤竜城城壁集落で、ここの全範囲は110万㎡に及ぶ。規模の最も小さいものは新石器時代の八十垱城壁で、総面積は3万㎡くらいである。

規模（集落遺跡面積）に基づいた試算人口数も、最も多いのは石家河城壁集落で、120万㎡で試算すると7,200人－9,000人であるが、100万㎡で試算する

と6,000人－7,500人である。また、最も小さい八十垵城壁遺跡では、可能な人口数は750－1,100と推定される。

城壁集落の機能から分析した結果、新石器時代では多種類の集落機能を備えた都市と認めたものはないが、商代では、多種類の集落機能を備えて、地理学意味上の都市であると認めたのは盤竜城1ヶ所である。

ほかの城壁を持つ集落については、八十垵のように、都市である可能性は全くと断言したり、ほかの城壁遺跡は都市である可能性が小さい、あるいは可能性があるかもしれないと断言を避けたりして、様々な「判断・推測」をしておいた。

これらの「判断」をするに当たっては、非常に慎重であったため、認められた初期都市は1ヶ所だけではあるが、信憑性はあると考えられる。

その他に、年代の古い城頭山城壁遺跡は規模が大きくないが、都市として認められる可能性があると考えられ、極めて重要な遺跡現象だと指摘したい。もしもこの規模が大きくない遺跡は都市だと明確にと認められるならば、長江流域全域の他の類似する城壁遺跡の初期都市の認定にも影響を与えるし、都市として認めることができるものは少なくないだろうと思われる。そうなれば、点在している「都市」が多くなり、先史時代の「都市群」が形成されていたことも考えられるだろう。この点を証明することができるならば、長江流域だけではなく、中国全土における最初期都市の出現、形成の過程についての研究にとっても重要な意義があると思われる。

長江中流域に止まらず、長江流域全域でこれからも先史時代の城壁をもつ集落が次々と発見されることを期待し、そこから相当数の先史時代の都市（中国の初期都市）が確認されていくことを期待したい。

注 釈

- [1] 鞏啓明・嚴文明「從姜寨早期村落布局探討其居民的社會組織結構」、『考古与文物』1981年1期

- [2] [3] [4] 荆州市博物館等「湖北石首市走馬嶺新石器时代遺址發掘簡報」,『考古』1998年4月,張緒球「屈家嶺古城的發現和初步研究」,『考古』1994年7期
- [5] [6] [7] 張緒球「屈家嶺古城的發現和初步研究」,『考古』1994年7期
湖北省荊門市博物館「荊門馬家垸屈家嶺文化城址調查」,『文物』1997年7期
岡村秀典・張緒球「湖北陰湘城遺址研究—1995年日中聯合考古發掘報告」,『東方學報』京都第69冊,1996年
- [8] [9] [10] [11] [12] 江陵縣文化局「江陵陰湘城的調查与探索」,『江漢考古』1986年1期
同注 [5] [6] [7] 岡村秀典・張緒球文
同注 [2] [3] [4] 張緒球文
荊州博物館,福岡教育委員會:「湖北荆州市陰湘城遺址東城牆發掘簡報」,『考古』1997年5期
荊州博物館「湖北荊州市陰湘城遺址1995年發掘簡報」,『考古』1998年1期
賈漢清・張正發「陰湘城發掘又獲重大成果」,『中國文物報』1998年7月1日
- [13] 山東省文物管理处「山東臨淄齊故城試掘簡報」,『考古』1966年6期
- [14] 石河考古隊「湖北省石河遺址群1987年發掘簡報」,『文物』1990年8期
石河考古隊「湖北天門市鄧家灣1992年發掘簡報」,『文物』1994年4期
北京大學考古系等「石家河遺址群調查報告」,『南方民族考古』第5輯,科學出版社2009年
張緒球「屈家嶺古城的發現和初步研究」,『考古』1994年7期
張緒球『長江中游新石器時代文化概論』,湖北科技出版社1992年10月
- [15] 張緒球「屈家嶺古城的發現和初步研究」,『考古』1994年7期
- [16] 盧可可「中國史前城址的區域与類型研究」,『中國歷史地理論叢』1998年3期
- [17] 中村慎一「石家河遺跡和中國都市文明的起源」,藤本強主編『住の考古学』,同成社1997年
- [18] 荊州博物館「湖北公安鷄鳴城遺址的調查」,『文物』1998年6期
- [19] 裴安平「澧縣八十垱遺址出土大量珍貴文物」,『中國文物報』1998年10期
- [20] [21] [22] 湖南省文物考古研究所,湖南省澧縣文物管理所「澧縣城頭山屈家嶺文化城址調查與試掘」,『文物』1993年12期
張緒球「屈家嶺古城的發現和初步研究」,『考古』1994年7期
「考古學家在京論証確認城頭山為中國已知時代最早古城址」,『中國文物報』1997年32期
「城頭山古城考古又獲新成果」,『中國文物報』1999年17期
同注 [27] [28] [29] 岡村秀典・張緒球文
『朝日新聞』2001年11月3日「日中共同長江文明學術調查団」
『中國文物報』2002年2月22日
- [23] [24] [25] 「考古學家在京論証確認城頭山為中國已知時代最早古城址」,『中國文物報』1997年32期
- [26] 陳樹詳・李桃源:「沔城門板遺址發掘獲重要成果」,『中國文物報』1999年26期
『中國文物報』2002年8月30日
- [27] 「天門發現湖北最早城址」『長江日報』2005年5月28日

- [28] 湖南省文物考古研究所「澧縣雞叫城古城址試掘簡報」,『文物』2002年5期
- [29] 湖北省文物考古研究所・天門市博物館:「湖北天門笑城城址發掘報告」,『考古學報』2007年4期
- [30] 李桃園・夏豐「湖北應城陶家湖古城址調查」,『文物』2001年4期
- [31] 劉輝「長江中游新石器時代城址聚落的新發現與新思考」,『中國聚落考古的理論與實踐(第一輯)——紀念新砦遺址發掘30周年學術討論會論文集』,文物出版社2010年
- [32] 荊門市文物考古研究所「湖北荊門市后港城河城址調查報告」,『江漢考古』2008年2期
- [33] 荊州市文物考古研究所・公安縣博物館・石首縣博物館「湖北公安、石首三座古城勘查報告」,北京大學編『古代文明(第4卷)』,文物出版社2005年11月
- [34] ①劉輝「江漢平原東北發現兩座新石器時代城址」,『江漢考古』2009年1期
 ②同注 [31]
 ③劉輝「叶家廟遺址發掘工作匯報」(湖北省文物考古研究所 PPT 資料,劉輝提供)
- [35] ①同注 [34] ①
 ②同注 [31]
- [36] 同注 [31]
- [37] 同注 [33]
- [38] 同注 [33]
- [39] 「盤龍城 1974 年度田野考古紀要」,『文物』1976 年 2 期
- [40] 同注 [31]

表 長江中流域先史城壁表

名称	位置・立地等	面積 (m ²)	推定人口 (人)	集落分類	年代 (文化) 等
1. 走馬嶺	湖北省石首市東昇鎮。高地に位置し、湖に近い。城内北東部居住区、南西部大規模建物群、城外環壕、南西に水門ある。	8 万	2,000 - 2,700	多種類機能？判断留保	屈家嶺文化。100 m ² 大型住居跡内 8-50 m ² 多室。集落計画あり、大規模建物群、権力の象徴？
2. 馬家嶺	湖北省荊門市猇亭村。回より 2-3 m 高い平坦高地。環壕、城門と水門、城内北東部に長さ 250m 台地、城外中・小型遺跡密集、聚落群？	20 万 24 万	3,700 - 5,100 4,500 - 6,100	多種類機能、都市の可能性大	屈家嶺文化。防御用高台、水門、合成環壕等、大規模集落、全体計画ある。
3. 陰湘城	湖北省荊州市馬山鎮。荊山余脈八嶺山岡、水郷。城内東・西居住区、中部耕作耕地、南西部墓地、長江本流に近い。	12 万 20.3 万 17 万	3,000 - 4,000 3,800 - 5,100 3,100 - 4,300	多種類機能、都市の可能性大	屈家嶺 - 石家河文化。住居跡集中、長期使用。居住区・耕作区・墓地等計画明確、大型分室住居
4. 石家河	湖北省天門市石河鎮。城内北東部高地、南西部低地、環壕跡残り、幅 60-100m、深さ 4-6m。中心部譚家嶺居住区、北西部鄧家灣祭祀区 (?)。回りに 50 ヶ所以上同時代遺跡、聚落群。	120 万 100 万	7,200 - 9,000 6,000 - 7,500	多種類機能、都市の可能性大	屈家嶺 - 石家河文化。厚い城壁造るため大量人力必要、建築專業？集落計画あり、それぞれ機能区。大量な動物彫刻、青銅器に符号。
5. 鷄鳴城	湖北省公安県清河村。泥水河と松滋河合流地「小平原」に位置。環壕幅 50-70m、城内中央部台地 4 万 m ² 、主要居住区と見られる。	15 万	2,800 - 3,800	多種類機能なし、都市の可能性小	屈家嶺文化。南城壁外に 2 万 m ² 小さい遺跡ある。
6. 八十当	湖南省澧県夢溪郷。古川筋沿い台地。環壕掘りの泥で城壁造られる。	3.7 万	750 - 1,000	農業聚落	彭頭山文化。城壁も環壕も水害防止のため (?)。最古モミ発見。
7. 城頭山	湖南省澧県車溪郷。環壕の一部は自然河。台地に城壁造られ、城内中心部に大型建物、栗石通路、城内外水路で繋がる。居住区・祭祀区・作業区・耕作区・墓地など配置計画明確。	7.5 万 8 万	1,800 - 2,500 2,000 - 2,700	多種類機能、都市の可能性ある	大溪・屈家嶺・石家河文化。最古稲作・最古城壁。城壁 4 回造りかえられる。都市と認定されれば意味深い。
8. 門板湾	湖北省應城市星光村。大洪山余脈地、東、南、北三面古川筋での環壕。城内西側台地、北東部と北西部に高台建築、城外に同時期の「從属遺跡」若干。	20 万	3,700 - 5,100	多種類機能、都市の可能性大	屈家嶺文化。115.5 m ² 大型住居跡あり、四室分け、回り回廊、外に 450 m ² 庭。

9. 竜嘴	湖北省天門市市吳劉村。東、西、南三方湖, 北環濠。	6 万 8.2 万	1,500 - 2,000 2,000 - 2,700	都市の可能性小, 判断留保	大溪文化中 - 後期。
10. 鷄叫城	湖南省澧縣澧南鄉復興村。台地, 東、西、南三方自然河, 北環濠。	「総面積約 22 万」	1,300 - 1,700	判断留保	屈家嶺文化初期 - 中期 - 石家河文化
11. 笑城	湖北省天門市市皂市鎮。山地から平原への移行地。城北の外に環濠, 他三方湖。	9.8 万 6.3 万	2,400 - 3,300 1,600 - 2,100	多種類集落機能なし, 都市の可能性小	屈家嶺文化後期 - 石家河文化初期。稻作と漁猟, 25 km 域内新石器城址城 4 ヶ所発見。
12. 陶家湖	湖北省沔陽市沔陽鎮。城壁外に環濠, 城内南部に大面積台地。	42.5 万 (総面積 67 万)	8,000 - 10,800	多種類機能あるかも, 判断留保	屈家嶺文化後期 - 石家河文化初期。
13. 王古留	湖北省安陸市李畈鎮。彎崗河北岸二級台地。城壁が 4-5m 高さ台地に造られ, 環濠, 城内北東, 北西は居住跡。	70 万 (城壁 24 万)	(4,500 - 8,200)	多種類機能あるかも, 判断留保	屈家嶺文化 - 石家河文化初期 - 中期。大型台地に数万 m ² の赤焼き跡。
14. 城河	湖北省沙洋県后港鎮。	50 万 (総面積 70 万)	9,300 - 12,700	判断留保	屈家嶺文化後期 - 石家河文化。石家河城壁に次ぐ大きさ。
15. 青河	湖北省公安県甘廠鎮。回りより高い台地, 近くに湖	6 万	1,500 - 2,000	判断留保	屈家嶺文化後期 - 石家河文化。
16. 叶家廟	湖北省孝感市朋興郷。城壁東部, 南東部環濠跡, 城内南東居住区, 西城壁外に臺地。	15 万	2,800 - 3,800	多種類機能あるかも, 判断留保	屈家嶺文化後期 - 石家河文化初期。遺跡範囲 5 km ² 回りに同時期遺跡 11 ヶ所, 集落群。
17. 張西灣	武漢黃陂区析家灣鎮。北, 東, 西三方環濠跡。	9.8 万	2,400 - 3,300	判断留保	石家河文化初期 - 中期
18. 土城	湖北省大悟県三里鎮	7 万	1,800 - 2,400	判断留保	石家河文化初期 - 中期
19. 屯子山	湖北省石首市東昇鎮。回りより高い台地に。走馬嶺と姊妹集落, 走馬嶺より南 150m。	8 万 (?)	2,000 - 2,700 (?)	判断留保	大溪文化後期 - 屈家嶺文化時期。年代「走馬嶺相当」
20. 蛇子嶺	湖北省石首市東昇鎮。東 - 西弧形土岡, 城門あり。	?	?	?	屈家嶺時期, 「走馬嶺・屯子山より年代遅い」。
21. 盤竜城	湖北省黃陂県葉店村。盤竜湖小半島に立地。環濠幅 10 m, 北東部台地に大規模建築群は宮殿区, 基礎台地に大規模宮殿。青銅器作業場等。	110 万 (宮城 7.5 万)	6,500 - 8,200 (1,900 - 2,500)	多種類機能。都市	商代。青銅器玉器等大量, 多種類。商王朝の「方国」?